

法政大学
国際日本学研究センター
国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.13 Dec.2010



C O N T E N T S

新事業紹介	2
文部科学省採択「国際共同に基づく日本研究推進事業」	4
国際シンポジウム報告	6
特別研究会報告	9
研究会報告	11
東アジア文化研究会報告	13
勉強会報告	20
お知らせ	22
新刊案内	23

2010年7月27日(火)

国際シンポジウム〈日本研究の最前線—大連における
多文化共生・異文化理解の研究と実践〉

(法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー
25階B会議室)

「＜日本意識＞の再検討」を掲げる 新たな研究事業の旗揚げにあたって

法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授
安孫子 信



文部科学省による「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」（平成 22 年度）に、本研究所が推す「国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来」が採択されました。本年平成 22 年（2010 年）から 5 カ年計画で本研究事業は遂行されていきます。研究の開始にあたり、研究の狙いや内容を簡単にご紹介いたします。

グローバリゼーションの荒波のなかで日本は揺らいでいます。日本の世界における経済的地位はもとより、政治的・文化的地位にも大きな陰りが生じています。その陰りは、巨大な問題に晒されているという事実そのものからというより、むしろ、そのような状況のなかで反転へと動き出す気配を見せない、日本の一種の無気力さから来ているように見えます。そして、その無気力さの出所をさらに探れば、そこには、依拠すべきセルフ・イメージの喪失ということがあります。“ジャパン・アズ・ナンバーワン”に代わって、自らを導く別の＜日本意識＞の形成が急がれるのです。その＜日本意識＞は、すべてが国境を飛び出すグローバルな環境下で、閉じたナショナルなものの再興ではありえないでしょう。本研究では、国際的であり学際的である国際日本学の方法を駆使しつつ、過去を見直し、他者に照らして、グローバリゼーションのなかで掲げられるべき新たな＜日本意識＞の可能性を探究していきます。

本研究は国際日本学、すなわち、学際的かつ国際的な日本文化研究を枠組みとして置きながら、そこに、手法や具体的課題を異にする、以下の 4 つのアプローチを立てて行われます。

- アプローチ①「＜日本意識＞の変遷―古代から近世へ」
- アプローチ②「近代の＜日本意識＞の成立―日本民俗学・民族学の問題」
- アプローチ③「＜日本意識＞の現在―東アジアから」
- アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量―未来へ」

アプローチ①では主に、日本文学、日本史、日本思想史の手法が用いられます。日本は古代から大陸とは異なる文化を創り上げようとしてきました。歴史の節目節目で＜日本＞という意識を持ち、それを文献にも記述してきました。ただそれは、近代国家理念に基づくナショナリズムとは別のあり様での＜日本意識＞だったはず。その別様の＜日本意識＞を、古代から近世まで、文献に記された「日本」、「大八洲」、「秋津島」、「やまと」、「倭」、「本朝」といった言葉の意味内容を、それらが置かれた文脈も考慮して順次に詳しく吟味していくことで、検証していきます。

アプローチ②では主に、民俗学・民族学が対象となります。明治以降の日本国家の自己認識の形成に民俗学・民族学の日本論が大きな役割を果たしました。明治から昭和までの民俗学・民族学のムーヴメントで従来あまり研究されてこなかったものを取り上げ、それが当時の＜日本意識＞の形成にどのような影響を与えたのかを検証します。扱われるのは、明治初年の『民事慣例類集』の調査旅行や、大正から昭和終戦時まで朝鮮・台湾で展開された日本民俗学・民族学研究、さらには、昭和の戦前・戦後を通じての岡正雄を軸とした日本民族学形成などの諸事例です。

アプローチ③では主に、日中文化論、現代中国論、現代韓国論、異文化コミュニケーション論の手法が用いられます。東アジアというリージョナルな枠組みのなかで、現代における日本文化の可能性と問題点を明らかにしていきます。ローカルな文化の一つである日本文化は東アジア各地域において、参照枠として、商品・広告・生活様式などに多様に影響を与え浸透しています。結果としてそこではローカルな文化の相互浸透を超えて、リージョナルな東アジア文化としてのハイブリッド化も生じてきています。その実態を個別具体的な「表象文化」を対象として調査研究し、＜日本意識＞の現代東アジアにおける存在意義を検証します。

アプローチ④では、哲学、社会学、宗教学といったいわばメタ・サイエンスの手法が用いられます。加えて、フランス・アルザス欧州日本学研究所、および中国・大連民族学院国際言語文化研究センターとの共同研究も行い、民族学で言う「三角測量」の方法も適用していきます。新しい＜日本意識＞の可能性を、このように、メタ・サイエンスの立場から学際的・国際的に問うなかで、とりわけ、先立つ 3 つのアプローチの成果を逐次、統括していった、将来にあるべき＜日本意識＞の一つのまとまった像の提示を目指します。

なお、以上の各アプローチの研究成果は、「ニューズレター」や「機関誌」、「報告集」といった刊行物を通してのみならず、すでに研究所内に設置されているサーバーと情報処理システムを駆使して、電子媒体を通じても発信がなされていきます。このようにして、本研究事業を通じて、国内外の研究者・研究機関とのネットワークのさらなる拡大を図っていきたいと考えています。

以上、本研究所の新たな研究事業に、これまで同様のご理解とご協力を賜ることができれば幸いに存じます。

Selection by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports Science and Technology as “Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities” (2010)

Research topic: *Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future*

This research project aims at a reconstruction of ‘Japan-consciousness’ which is currently experiencing the monumental effects of globalization. As this cannot mean a restoration of closed nationalism, what might new ‘Japan-consciousness’ actually be? Using methods from International Japanese Studies, and while reflecting on the past and highlighting the “other”, this question will be investigated during a 5-year project (2010-14).

This research project will be carried out through the 4 Approaches below.

Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”. Using methods of

Japanese literature and history, terms for “Japan” will be sought in literary documents.

Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’: Issues of Folklore Studies and Ethnology”. The relationship between modern-era folklore studies, ethnology and “Japan-Consciousness” will be examined.

Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”. Within the framework of East Asia, the possibilities for Japanese culture in the present day will be sought using theories of comparative culture.

Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”. Results gained from the preceding 3 Approaches will be combined by considering them in interdisciplinary and international ways from the angle of meta-physics.

Differing in their methods and actual topics, the 4 Approaches will compete and cooperate along the way towards the main objective of fully understanding the new “Japan-consciousness”.

Report by: ABIKO Shin (Director and Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Faculty of Letters)

有关科研项目「日本意识再探讨」的简介

法政大学国际日本学研究所的科研项目「基于国际日本学方法论的日本意识再探讨-日本意识的过去，现在，将来-」在平成22年度（2010年）被文部科学省正式审定，为「私立大学战略性研究基盘形成支援事业」。本研究项目共有以下4个课题。

课题1 主要运用日本文学，史学，思想史的研究方法，对文献中所记载的「日本」、「大八洲」、「秋津島」、「大和」、「倭」、「本朝」等词进行考察。

课题2 以民俗学、民族学为研究对象，对明治初期的『民事慣例類集』中的調査旅行，大正到昭和期间在朝鲜・台湾开展的日本民族学・民俗学研究、以及以岡正雄为基轴的日本民族学的形成等具体事例作详

细剖析。

课题3 运用日中文化论、现代中国论、现代韩国论、異文化交流论等研究手法，通过分析日本文化在东亚各地区人们日常生活中的种种渗透事例，来探寻日本意识在当代东亚的意义。

课题4 主要运用哲学、社会学、宗教学等研究手法。通过与法国的阿尔萨斯欧洲日本学研究所、中国・大连民族学院国际语言文化研究中心的共同研究、即类似于民族学上所说的「三角测量」的方法，对之前的3个课题进行总括，勾勒出今后日本所应当具有的日本意识。

【执笔者：安孙子 信】

（法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授）

문부과학성(文部科学省)「사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업」(헤이세이(平成) 22년도)에 채택.

—연구 과제: 국제일본학 방법에 기초한 <일본 의식> 재검토—<일본 의식>의 과거·현재·미래—

본 연구 사업은 글로벌리제이션의 격랑 속에서 크게 흔들리고 있는 <일본 의식>의 재구축을 목표로 하고 있습니다. 폐쇄된 내소날리즘을 부흥시키는 일은 있을 수 없습니다. 그렇다면 새로운 <일본 의식>은 어떤 것일까. 이러한 문제를 국제일본학 방법을 구사하여 과거를 재인식하고, 타자와의 비교를 통해 5개년 계획(2010-2014년도)으로 탐구합니다.

본 연구 사업은 아래의 네 가지 연구법에 따라 수행됩니다.

연구① 「<일본 의식>의 변천-고대에서 근세로」. 일본

문학, 일본사의 연구법을 사용하여「일본」이라는 단어의 의미를 문헌을 통해 살펴봅니다.

연구② 「근대 <일본 의식>의 성립-일본 민속학·민족학의 문제」. 근대일본에 있어서의 민족학·민족학의 성립과 <일본 의식>과의 관계를 고찰합니다.

연구③ 「<일본 의식>의 현재 -동아시아를 기점으로-. 동아시아의 틀 안에서 현대 일본문화의 가능성을 비교 문화론적으로 탐구합니다.

연구④ 「<일본 의식>의 삼각측량-미래를 향해」. 위에서 언급한 세 가지 연구의 성과를 메타·사이언스 입장에서, 학제적·국제적으로 타진하는 과정을 통해 통괄해 갑니다.

연구 방법과 구체적인 과제가 서로 다른 네 가지 연구법이 경쟁과 협력을 거듭하는 가운데 새로운 <일본 의식>의 획득을 지향합니다.

【기사 집필: 아비코 신】

(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」(平成 22 年度)への採択

—研究課題：欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の 悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究—

文部科学省の平成 22 年度よりのこの新事業では、海外にある日本関係の文化資源を活用した国際的共同研究を推進することで、日本研究での新たな知見を発掘すること、さらには、このような共同研究を通じて強固な国際ネットワークを構築して、日本研究を世界規模で持続的に発展させていくことが、目指されています。この事業に、本研究所が応募した研究プログラム<欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究>(研究代表者 ヨーゼフ・クライナー教授、2010 年—12 年

の 3 年計画)が採択されました。本研究は、日本仏教美術関係資料(仏像, 仏画, 宝貝, お札など)を所蔵する欧州の博物館・美術館を対象として、ENJAC (European Network of Japanese Art Collections)ならびにチューリッヒ大学東アジア研究所日本学部門との連携の下で、それら資料の総合的な調査と分析とを行なうものです。本研究で集約されたデータは広く世界に公開される一方で、法政大学で学術的に分析され、欧州の日本文化に対する視点、すなわち「外から見た日本」、の検討に用いられていきます。

Selection by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports Science and Technology as “Japanese Research Promotion Project based on International Cooperation” (2010)

Research topic: Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese View

This new project of the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology starting in 2010 promotes international cooperative research utilizing cultural resources abroad that are related to Japan. It aims to uncover new findings in Japanese research, and furthermore create strong international networks through

such cooperative research so that Japanese research continues to be exhibited on a worldwide scale. The research program, ‘Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the European View Japan’ (Research representative, Professor Josef Kreiner, 3-year plan 2010-12), submitted by the Center, has been selected for this project. Research focuses on the museums and art galleries of Europe which hold collections of Japanese Buddhist art-related material (Buddhist statues, Buddhist paintings, utensils used in worship, *o-fuda*/charms etc.), and involves overall surveys and analysis of material in cooperation with ENJAC (European Network of Japanese Art Collections) and Zurich University. The consolidated data from this research will be made available worldwide, while at Hosei University it will be analyzed academically and used to examine the European view towards Japanese culture, in other words, “Japan seen from outside”.

文部科学省“基于国际化的日本研究推进事业”(2010 年)
研究課題：有关欧洲博物馆里保存的日本佛教美术资料的调查以及这些资料所反映的日本与日本观的研究

文部科学省于2010年开展了一项新的科研计划。这项计划的目的在于通过灵活运用海外的日本文化资源并挖掘出以往的日本研究未曾瞩目的内容。在此基础上，通过国际性的共同研究构建一个强有力的国际互联网，使日本研究能够以世界性的规模而持续发展。法政大学日

本学研究所制定的三年科研计划(2010年-2012年)“有关欧洲博物馆里保存的日本佛教美术资料的调查以及这些资料所反映的日本与日本观的研究”(研究代表：约瑟夫·库拉伊纳教授。)被日本文部科学省所采纳。此次科研项目在 ENJAC (European Network of Japanese Art Collections) 和 Zurich大学 (University of Zurich) 的共同协作下，对保存在欧洲博物馆，美术馆等处的日本佛教美术的相关资料(佛像，佛画，纸币等)作综合性的调查分析。此次科研所收集的信息数据在公布于世的同时，法政大学内部也将以审视欧洲的日本文化为视角，对这些信息数据作学术性的分析。

문부과학성(文部科学省)「국제 공동에 기초한 일본 연구 추진 사업」(헤이세이(平成) 22년도)에 채택

—연구 과제：구주(欧州) 박물관 등에 보관되어 있는 일본 불교미술 자료의 전체 조사와 자료를 통한 일본과 일본관 연구—

문부과학성은 헤이세이22년도(2010년)부터 시작한 새로운 사업을 통해, 해외에 있는 일본 관계 문화 자원을 활용한 국제적 공동 연구를 추진하고 있습니다. 이러한 사업을 통해서 일본 연구의 새로운 지평을 발굴하고, 나아가 이러한 공동 연구를 통해 견고한 국제 네트워크를 구축하여, 세계 규모의 일본 연구를 지속적으

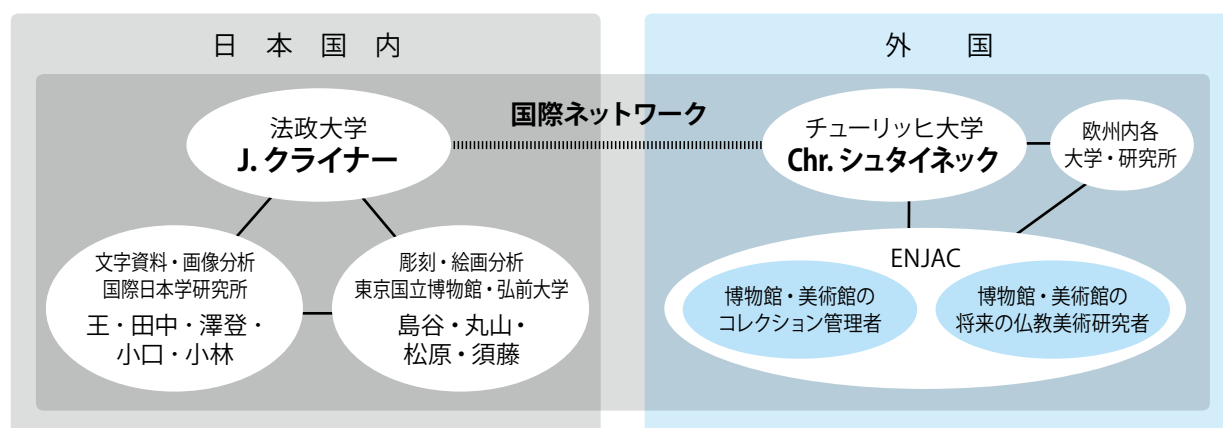
로 발전시킬 것을 목표로 하고 있습니다. 이 사업에 본 연구소가 응모한 연구 프로그램 <구주 박물관 등에 보관되어 있는 일본 불교미술 자료의 전체 조사와 자료를 통한 일본과 일본관 연구>(연구 대표자 요셉 클라이너교수, 2010년-2012년, 3년 계획)가 채택되었습니다. 본 연구는 일본 불교미술 관계 자료(불상, 불화, 부적 등)를 소장하고 있는 구주 박물관·미술관을 대상으로, ENJAC (European Network of Japanese Art Collections)와 추리히대학과의 연계를 통해, 자료를 종합적으로 조사·분석합니다. 본 연구를 통해 집약된 데이터는 전 세계에 널리 공개되는 한편, 호세이대학(法政大学)에서 학술적으로 분석하여 구주의 일본문화에 대한 시점, 즉, 「외부에서 보는 일본」을 검토하는데 사용될 예정입니다.

●研究イメージ

研究概要

- ①収 集：法政大学指導の下、本研究代表者が委員を務める全欧学術組織の ENJAC (European Network of Japanese Art Collections) を通じての資料収集
- ②集 約：チューリッヒ大学に専任の担当者を配し、情報集約および整理の実施
- ③デジタル化：②で集約した情報の法政大学への転送と、法政大学における情報のデジタル化および WEB 上での公開（当初は共同研究用の内部向け）
- ④分 析：法政大学およびチューリッヒ大学を拠点に、国内外の共同研究者による情報分析
- ⑤公 開：分析・研究成果の公開（総括シンポジウム、英語出版、WEB 上でのカタログの完全公開等）

研究実施体制



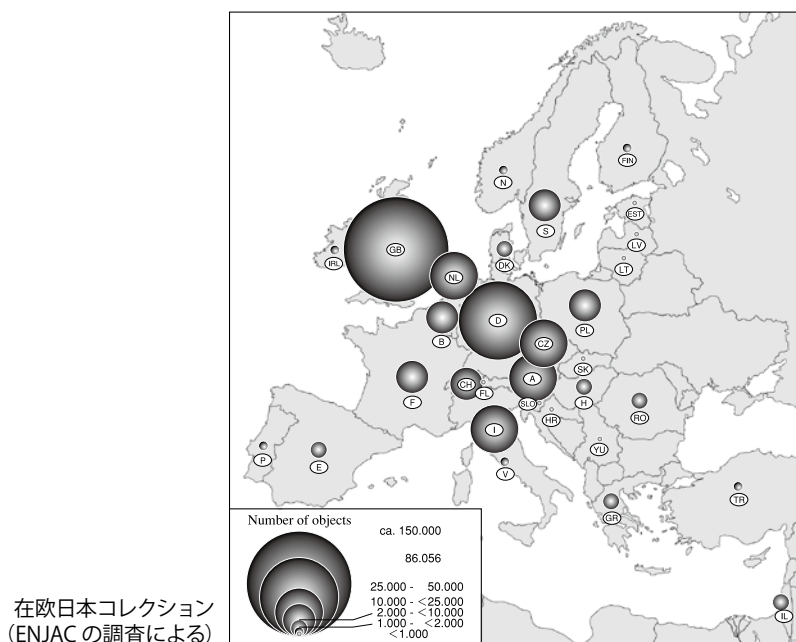
期待される成果

■欧州における日本研究への寄与

- ①日本研究の組織化：法政大学およびチューリッヒ大学を中心とし、ENJAC を媒介に全欧州の研究機関が組織化；欧州での日本研究の大学・博物館間協力態勢の構築
- ②日本研究の拡大：欧州における日本研究の仏教分野充実；欧州における日本美術研究の地位向上
- ③日本研究のための研究者養成：共同研究による日本から欧州への高度研究手法の伝授；欧州における研究者育成への寄与；日本研究の他分野への波及効果

■日本への寄与

- ①未知の研究素材の発掘・提供：在欧仏教美術関係資料の悉皆調査実施による実現；お札研究の逆輸入による新研究分野の創成
- ②新たな「日本」像の構築：国際日本学的「外からの視点」導入による研究方法の革新



戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

国際シンポジウム

〈日本研究の最前線 — 大連における多文化共生・異文化理解の研究と実践〉

- 主 催：法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究所
- 後 援：人民日報海外版・日中新聞社
- 日 時：2010年7月27日（火）10:00～18:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25階B会議室
- コーディネーター・総合司会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）
- 司 会：午前の部：菱田 雅晴（法政大学法学部教授）
午後部：高柳 俊男（法政大学国際文化学部教授）
共同討議：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

曆を1904年に戻してみよう。当時大連は日露戦争の戦場であった。同じ頃、法政大学は清国留学生の受け入れを始め、中国の将来を担う人材を育成していた。同時代の「大連」と「東京」に思いをはせると、日本と中国の関係は、国際間、国家間、また個人間においても複雑な関係が交錯し、紆余曲折を経て発展してきた。国際環境という背景や国家の発展という大前提のもとに、大連という地域は独自の発展を遂げ、その歴史的、地理的特色から、独自に異文化理解と多文化共生の体験に基づく知恵を蓄積し、成長してきたといえる。

現在、大連は日本との異文化理解、多文化共生に力を注いでいる。大連の日本企業は6000社に達し、高等教育機関では日本語の人材を毎年5000名養成し、日本語人口は30万人にも及び、小学校から高校に到るまで日本語教育が普及しているという。大連は国際都市として文化・経済交流の要衝となりつつあり、日中関係の最前線をなしているといえる。

シンポジウムを共催した大連民族学院は、国家民族委員会に属する公立総合大学として、多民族中国ならではの特色ある教育と研究を実践している。国際的な異文化交流だけでなく、多民族国家である中国国内における異文化交流の重要性を強調していることが最大の特徴であり、56の民族が学ぶ大連民族学院は多文化共生の理念を目標とする内外異文化交流の最前線である。

シンポジウムは、まず日中双方からの基調報告で幕を開けた。大連民族学院学術委員、教授の王秀文氏は、「日中文化交流の昔と今—文化異同と異文化理解のために—」と題して講演し、1. 地理的に近く交流の歴史が長い場合でも、文化の相違を重視すべき、2. グローバル化・多元化・流動化・活性化しつつある国際社会の中で、「小異を残して大同を求める」思考が必要、3. 幅広い民間交流を促進し、相互理解を深めることが必要、と主張した。法政大学国際文化学部長、教授の曾士才氏の基調報告は、「庶民の日中交流—江戸時代の大連・長崎から学ぶこと」と題して行われた。江戸時代に国際都市として発展してきた長崎において、庶民レベルでの異文化交流が行われていたことを、特に中国系移民の過去と現在を中心に紹介した。長崎において多文化共生の知恵が蓄積されていたことを再評価し、国内外に向けて発信しながら今後の異文化理解の参考にすべきという報告であった。

基調報告に続いて行われた各報告の要旨は以下のとおりである。

1. 秦顕氏（大連民族学院助教授）「中国における二宮尊徳思想と実践研究の展開と意義—大連を中心に」

二宮尊徳の報徳思想は近代社会における日本人の道徳を陶冶し、規整し、人間関係の調和を保ち、日本社会の発展および人間生活の向上に多大なる影響を与えた。今日、世界規模での金融危機、気候温暖化、テロ、核拡散などの諸問題が発生し、中国では資源、エネルギー問題、環境問題、「三農」問題、所得分配不均衡などの厳しい情勢がある。このような情勢の中で、二宮尊徳・報徳思想の現実的意義および参考価値を探究した。

2. 小林ふみ子氏（法政大学キャリアデザイン学部准教授）「近世日本の通俗文学における教訓性と中国思想—山東京伝の心学物黄表紙を例に」

今日の眼からすれば、「教訓」は「文学」と相矛盾するものであるかのようであるが、当時は娯楽のための小説も何らかのかたちで有用であることが求められ、それが実用性・教訓性といったかたちで表された。その事例として、寛政の改革期に人気を呼んだ江戸の戯作者山東京伝の黄表紙を例に考察した。

3. 劉振生氏（大連民族学院助教授）「近代日本の文人大連—夏目漱石・中島敦、清岡卓行を例に」

三人の作家・詩人の大連における体験は、近代日本人の精神世界に最も迫り得るものである。彼らによる中国を対象とする異文化体験の遍歴は、近代日本文学において特別な一頁を成し、日本文人ないし国民全体の歴史的、文化的、精神的遺産になると考えられる。

4. 藤村耕治氏（法政大学文学部准教授）「清岡卓行と大連」

近代以降、文学的に最も豊かな大連像を定着させたと言われる清岡卓行が、愛着と郷愁に満ちた故郷であると同時に、引け目と後ろめたさの源としての日本植民地でもあった「大連」とどのように向き合い、その間の葛藤と矛盾をどのように整理し、透明な色彩によって描いたのか、作品の制作年代に沿って辿りつつ分析し、清岡卓行における大連の意味と大連像を当時の生存環境のもとで検討した。

5. 劉俊民氏（大連民族学院助教授）「中日間経済合作における文化摩擦に関する研究—教育現場における日本企業文化への理解を中心に」

中日経済交流において、行動様式・考え方・価値判断の相違に起因する支障が関係者により指摘されている。報告ではインタビュー調査とマインドマップ調査法を用い、中国進出の日本企業のマネージメント層や従業員および中日両国の大学生を対象に、相互にいかなるイメージを有し、いかなる面で違和感を覚えるのか等を調査した。文化の違いの誘因となる制度や社会の発展段階なども無視することはできないという観点から報告した。

6. 山田泉氏（法政大学キャリアデザイン学部教授） 「中国における多文化共生教育としての年少者日本語教育の試み」

中国における初等中等教育の外国語については、2001年より新たな『課程標準』のもとに教育実践が進められている。外国語教育が、単に外国語の理解・運用だけを目指すのではなく、グローバル社会を生き、建設していく「人間性を養成」することを中心に据えたといえる。そのひとつには多様な文化の受容があり、中国が多民族文化社会であることと深く関係している。大連の学校教育における取り組みを中心に、外国語としての年少者日本語教育が果たすべき役割を考察する。

7. 郭勇氏（大連民族学院講師）「日本語での非対面型ビジネスコミュニケーションについて－異文化環境に適した人材育成のために」

現在、外国語の言語能力だけでなく、異文化コミュニケーション能力が必要とされている。コミュニケーションは対面型と非対面型に分けられるが、今回は非対面異文化コミュニケーション能力の育成について考察した。日本語教育者の立場に立ち、授業の中でどのような取り組みを行うべきかという模索である。

8. 福田敏彦氏（法政大学キャリアデザイン学部教授） 「日中の広告文化－共通点・相違点・文化摩擦－」

日本の広告が感情や美意識に訴えようとするのに対して、中国の広告は意思や倫理に訴えようとする。商

品関連の表現の仕方も異なるところがある。報告では、具体的な広告の事例をもとに、日中のメッセージとコードについて比較し、近年発生した日中の広告摩擦について分析した。

これらの各報告に続き、「日本意識の現在～大連を事例に～」と題した共同討議が行われた。今回の国際シンポジウムの特徴は、以下の5点を挙げることができる。

1. 各報告に共通する点として、知的構築においては、国籍はもとより細分化された研究ジャンルを超えた多様な教養を育み、視野を広げることが重要であるとの議論がなされた。
2. 報告者たちの議論は、異文化理解・多文化共生を文献研究のみならず、現場での検証を踏まえた研究報告として行われ、現実的な意義が強調された。
3. 個々の報告のテーマは異なるものの、研究のアプローチには共通点も多く、今後の研究と交流に示唆を与え、多分野に活用できる方法論を提供した。
4. 研究と交流は異なる分野と考えるありかたもあるが、今回のシンポジウムでは研究と交流の有機的な関連こそ研究にとって新たな地平線を切り拓くものになるという認識を深めた。
5. アジアにおける研究と交流、中でも日中の相互学習、相互研究を通じて、日本学研究にも飛躍的な進展が期待されることを相互に再確認した。

以上のように、今回の国際シンポジウムは、研究の成果を研究と教育の現場に、実際の交流にどのようにいかすべきかという視点に立つ建設的な議論を展開することができ、大変有意義なものとなった。開催にあたりご協力頂いた大連民族学院をはじめ、後援の人民日報海外版・日中新聞社および法政大学国際交流センター、関係機関の尽力に心から感謝する。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】



開会挨拶：星野 理事
（国際日本学研究所長）



総司会：王 敏 教授



基調報告：王 秀文 教授



共同討議



共同討議司会：安孫子 信 教授（左）、
王 秀文 教授（右）



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based
on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-
consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia (4th East Asian Culture Research Meeting of 2010)

International Symposium

“The Front Line in Japan Research: Research and Realization of Multi- cultural Co-existence and ‘Other’- cultural Understanding in Dalian”

Sponsor: Hosei University Research Center for International
Japanese Studies, Institute of International
Japanese Studies

Support: Jinmin Nippo Foreign Edition, Nicchu
Shimbunsha

Date: Tuesday, 27 July 2010, 10:00-18:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade
Tower 25F Conference Room B

Coordinator/Overall Chair: WANG Min (Professor, Hosei
University Research Center for International
Japanese Studies)

Chair: Morning session: HISHIDA Masaharu (Professor,
Hosei University Faculty of Law)
Afternoon session: TAKAYANAGI Toshio
(Professor, Hosei University Faculty of
Intercultural Communication)

Joint discussion: ABIKO Shin (Director and
Professor, Hosei University Research Center
for International Japanese Studies, Faculty of
letters)

With research and realization of multi-cultural co-
existence and ‘other’-cultural understanding in Dalian as
reference point, reports were given and a joint discussion
was held titled “Present-day ‘Japan-consciousness’:
Dalian as Example”. The symposium had the following 5
characteristics:

1. It educated in ways transcending culture and genre,
and a wide view was vital for intellectual advancement.
2. It emphasized real-life significance through research
reports based on not just literary material, but also on
fieldwork examination.
3. It proposed methods that provided clues for future
research and exchange.
4. Research and exchange are usually considered different
fields, but here discussion developed through their
connectivity.
5. It anticipated progress in research and exchange in
Asia, especially in Japanese studies through joint
China-Japan research.

This symposium was particularly significant in
developing constructive discussion on how to make the
results of research play a role in actual exchange.

Report by: WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies)

战略性研究基盤形成支援事業「基于国际日本学方法论
的日本意识再探讨－日本意识过去，现在，将来－」

国际学术研讨会：

「日本研究的最前线－大连的多文化共存・异 文化理解的研究与实践」

主办方：法政大学国际日本学研究中心/国际日本学研究所
后援方：人民日报海外版/日中新闻

日期：2010年7月27日（星期二）10:00-18:30

会场：法政大学市谷校区BT25楼，B会议室

综合主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

主持人：上午部：菱田 雅晴（法政大学法学部教授）

下午部：高柳 俊男（法政大学国际文化学部教授）

共同讨论者：安孙子 信（法政大学国际日本

学研究所所长，文学部教授）

本次大会以大连的多文化共存・异文化理解的研究和
实践为例，进行了综合讨论。通过两个基调报告，八个研
究报告，明确了以下五点。

1. 跨文化，跨领域的研究视角对于知识的构建有着至关
重要的作用。
2. 通过具体的实地调查而得出的研究成果，同样具有很
强的现实意义。
3. 为今后的研究和交流提供了有参考价值的方法论。
4. 强调了研究和交流的有机结合所具有的重要意义。
5. 通过日中之间的相互研究和交流，使人们可以相信今
后的日本学研究必定会有飞跃性的进展。

【执笔者：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업「국제일본학 방법에 기초
한〈일본 의식〉재검토－〈일본 의식〉의 과거・현재・미래」
연구③〈일본 의식〉의 현재－동아시아를 기점으로 (2010 년
도 제 4 회 동아시아문화연구회)

국제심포지움

〈일본 연구의 최전선－대련(大連)의 다문 화 공생・이문화 이해 연구와 실천〉

주 최: 호세이대학(法政大学) 국제일본학연구센터・
국제일본학연구소

후 원: 인민일보 해외판・일중신문사

일 시: 2010년 7월 27일(화) 10:00 ~ 18:30

장 소: 호세이대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 보아소
나드타워 25층 B회의실

코디네이터・종합 사회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국
제일본학연구소 교수)

사 회: 오전 세션: 히시다 마사하루(菱田 雅晴, 호
세이대학 법학부 교수)

오후 세션: 다카야나기 도시오(高柳 俊男,
호세이대학 국제문화학부 교수)

공동 토의: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대
학 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)

대련의 다문화 공생・이문화 이해 연구와 실천을 참고
로 한 두 건의 기초 보고, 여덟 건의 보고와「일본 의식의
현재～대련을 사례로～」라는 제목의 공동 토의가 있었다.
심포지움의 특징은 아래의 다섯 가지로 정리할 수 있다.

1. 문화나 장르를 초월한 다양한 교양을 육성하고 시야
를 넓히는 것이 지적 구축에 중요하다.
2. 문헌 연구뿐만 아니라 현장 감증을 거친 연구 보고
인 만큼 현실적인 의의를 강조했다.
3. 앞으로의 연구와 교류에 지침이 되는 방법론을 제공
했다.
4. 연구와 교류는 다른 분야라는 견해가 있는데, 이번
심포지움에서는 오히려 연구와 교류의 유기적인 관
계야말로 중요하다는 논의가 전개되었다.
5. 아시아의 연구와 교류, 그 중에서도 일중 상호 연구
를 통해서 일본학 연구에도 비약적인 진전이 기대된
다는 점을 확인할 수 있었다.

이번 국제심포지움은 어떻게 하면 연구 성과를 실제
교류에 효과적으로 적용할 수 있는가 하는 관점에서 건
설적인 논의가 전개되어 매우 뜻 깊은 토론회가 되었다.

【기사 집필: 왕 민(王 敏,
호세이대학 국제일본학연구소 교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

法政大学国際日本学研究所特別研究会

「いつから「国民」はいるのか—日本の場合」

●講演者：渡辺 浩（法政大学法学部教授）

●日 時：2010年7月15日（木）18：30～20：35

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25階B会議室

●司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

去る7月15日（木）、18時30分から20時35分まで、法政大学ボアソナード・タワー25階のB会議室において法政大学国際日本学研究所の特別研究会が開催された。今回は、法政大学法学部教授の渡辺浩氏を迎え、「いつから「国民」はいるのか—日本の場合」と題して行われた。

報告の主眼は、「明治時代以前に「国」という意識はなかった。あったのは「国＝大名の領国」という意識だけである」あるいは「「国民国家」という概念は近代の捏造である」という単純な議論が誤謬の上に成り立つものであり、実は江戸時代にすでに「大名の領国」を越える、「一つの国としての日本」という意識が存在していたことを明らかにすることであった。報告の概要は以下の通りである。

江戸時代には、確かに大名の領地が変わることを「国替え」といい、参勤交代を終えて江戸から領国に帰ることを「帰国の御暇を賜る」と表現した。しかし、「和国」や「皇国」といった表現も用いられており、「国」という言葉が大名の領国を意味するだけではなかったことは明らかである。また、徳川政権は、同政権が成立したことを「豊臣の世に代わって徳川の世が始まった」という意味で、「開国」と称していた。ここから、江戸時代において、「国」という言葉には「大名の領国」、「日本国」、そして「ある政権の治世」という三重の意味があることが分かる。

また、元禄13（1700）年序の西川如見『日本水土考』に「万国は各々自国を以て上国と為して、しかも自国の説を用ひて自国の美を断ずる」とあるように、世界には「万国」があるという考えもすでにあった。なお、「日本国」の範囲には、松前藩の領地以外の蝦夷地と琉球国は含まれないのが通例であった。そして、この「日本国」が成立しえた理由は、当時、「政治的統合」、「経済的統合」、「言語的統合」、「宗教的統合」があったからである。

その「政治的統合」は入念だった。すなわち「高度な訴訟社会」、「外国人の送還」、「全ての宗教施設は寺社奉行の支配下に置かれる」、「家職国家、家業国家」などがそれを示している。この仕組みによって、「訴訟を受け付け、判断を下す機構としての「お上」、「日本人」と「外国人」を分けることが可能」、「宗教権力の世俗権力に対する超越性を認めない厳格な統治」、「血統ではなく、家職、家業の連続性のみが家を構成する」という江戸時代の像が浮かび上がる。

一方、例えば『文明論之概略』において福沢諭吉が主張したような、「日本には政府ありて国民（ネーション）なし」という考えは、「能動的な市民」が存在しなかったことに由来している。なぜなら、例えばイギリスの政治学者デヴィッド・ミラーは「ネーション」を

「(1) 共有された信念と相互関与によって構築され、(2) 歴史の中で長期にわたる広がりを持ち、(3) その特性は能動的であり、(4) ある特定の領土に結びついており、そして(5) 固有の公共文化によって他の共同体から区別された共同体である」と定義しており、その定義に従えば、江戸時代の日本には「能動的なネーション」以外の要素が全て備わっていたからである。このような状況を考えるならば、江戸時代の日本には、(1) 国民（civic nation）は存在せず、(2) 民族（ethnic nation）が存在したかどうかは、共通出自の意識が必ずしも一般的でなかったことの評価によって決まり、(3) 臣民（subject）は存在した、ということができる。つまり、日本においては、「国民」の形成以前に「臣民」が存在していたのであり、「日本」や「日本人」といった概念が、「上からの統合」によって成立していたのである。

しかしながら、nation や ethnicity についての議論は欧米の学者を中心として行われていることもあり、日本の学者自身も日本の事例を具体的な検討の対象として想定しない場合が多い。だが、nation や ethnicity 研究の分野においても、日本、さらに中国や朝鮮などを視野に入れることで、国際政治学や政治理論の進展にも寄与しうるのである。

以上のように、江戸時代の文物や制度と徳川幕府の統治機構のあり方を丹念に検証することで、江戸時代における、様々な層の人が抱いた「日本」や「日本人」という観念を基に論証したのが、本報告である。

「国際政治学者や理論政治学者も、ヨーロッパだけではなく、日本や中国、朝鮮の歴史に学べば、より適切な理論を構築できるだろう」という指摘は、国際政治学や理論政治学ばかりでなく、様々な分野に応用されうる、きわめて重要でありながらわれわれが見落としがちな観点であるといえるだろう。

その意味でも、今回の報告は国際日本学の研究にとっても、またそれ以外の分野の研究にとっても、意義深いものであった。

【記事執筆：鈴木 裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



渡辺 浩 教授

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

Hosei University Research Center for International Japanese Studies Special Research Meeting

“When did Japan become a ‘Nation of People’?”

Lecturer: WATANABE Hiroshi (Professor, Hosei University Faculty of Law)

Date: Thursday, 15 July 2010, 18:30-20:35

Location: Hosei University Ichigaya Campus Boissonnade Tower 25F Conference Room B

Chair: ABIKO Shin (Director and Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Faculty of letters)

The Hosei University Research Center for International Japanese Studies welcomed Professor WATANABE Hiroshi from the Faculty of Law, and held a Special Research Meeting entitled “When did Japan become a ‘Nation of People’?”

“Before the Meiji period there was no consciousness of ‘country/nation’; the only consciousness was of ‘country as feudal lord’s domain’”, or “The concept of ‘nation state’ is a modern fabrication”: these simple arguments have been built upon a fallacy. The main objective of the report was to show that in fact there already existed during the Edo period a consciousness, transcending ‘feudal lord’s domain’, of ‘Japan as one nation’.

A careful examination of Edo period literature and systems, and of the Tokugawa Shogunate’s government organization, indicated the nature of the perception of ‘Japan’ and ‘Japanese people’ for various levels of people during the Edo period.

The report ended, “If scholars of international and theoretical politics studied not only the history of Europe, but also that of Japan, China and Korea, they would be able to shape more pertinent theories.” This view is relevant not just regarding the study of international and theoretical politics, but also regarding various fields, and despite being important, is one that we tend to overlook. The report was thus significant for research in international Japanese studies, and in other fields.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Guest Scholar, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略性研究基盤形成支援事業「基于国际日本学方法论的日本意识再探讨－日本意识过去，现在，将来－」

研究课题1 日本意识的变迁－古代到近世－

法政大学国际日本学研究所特别研究会

「『国民』是何时出现的一以日本为例」

报告者：渡边 浩（法政大学法学部教授）

日 期：2010年7月15日（星期四）18:30-20:35

会 場：法政大学市谷校区BT25楼，B会议室

主持会议：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授）

本次报告的主旨在于纠正「明治维新前没有国家意识，所谓的国家单单指各大名所属的领地」这种错误认识。

其实在江户时代，就已经出现了超越大名领地这层含义的「日本国家」的概念。

渡边教授通过对江户时代的文物制度以及德川幕府的统治方法进行了详细考证，证明了在江户时代，社会不同层次的人们所具有的「日本」和「日本人」的观念。

在报告的最后，渡边教授指出，无论是国际政治学家还是理论政治学家，如果能够将目光不仅仅局限于欧洲，对于日本，中国，朝鲜等亚洲国家的历史也能深入研究的话，其所提出的理论应该会有更强的合理性。其实，渡边教授的观点同样适用于国际政治学和理论政治学以外的领域。此次报告意义深远。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업「국제일본학 방법에 기초한〈일본 의식〉재검토－〈일본 의식〉의 과거・현재・미래」
연구①「〈일본 의식〉의 변천－고대에서 근대로」

호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소 특별 연구회

「언제부터 「국민」은 존재하는가－일본의 경우」

강연자: 와타나베 히로시 (渡边 浩, 호세이대학 법학부 교수)

일 시: 2010년 7월 15일 (목) 18:30 ~ 20:35

장 소: 호세이대학 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스 보아소 나드타워 25층 B회의실

사 회: 아비코 신 (安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)

호세이대학 국제일본학연구소 특별 연구회는 와타나베 히로시 호세이대학 법학부 교수를 맞이해 「언제부터 「국민」은 존재하는가－일본의 경우」라는 제목으로 강연회를 개최했다.

보고의 키포인트는 「메이지 (明治) 시대 이전에는 「국가」라는 개념이 없었다. 그 시대에 존재했던 것은 「국가=다이묘 (大名, 영주를 의미함)의 영국 (領国)」이라는

개념뿐이었다」, 혹은 오진으로 말미암아 「『국민국가』라는 개념은 날조된 근대 의식이다」라는 단순한 논의가 성립되어 있으나, 사실상 에도 (江戸) 시대에 이미 「다묘의 영국」을 초월한 「하나의 국가로서의 일본」이라는 의식이 존재했었다는 사실을 증명하는 것이었다.

결론으로, 에도시대의 문물이나 제도와 도쿠가와 (徳川) 막부의 통치 기구 형태를 세밀히 검증하는 작업을 통해, 에도시대에 다양한 계층의 사람들이 품고 있었던 「일본」이나 「일본인」에 대한 관념의 실상을 제시했다.

와타나베씨는 보고의 말미에 「국제정치학자나 이론정치학자도 유럽에만 치중할 것이 아니라 일본이나 중국, 조선의 역사를 배운다면 보다 적절한 이론을 구축할 수 있을 것이다」라고 지적했다. 이는 국제정치학이나 이론정치학뿐만 아니라 여러 분야에 고루 응용할 수 있는, 매우 중요하면서도 간과하기 쉬운 관점이다. 그런 의미에서도 이번 보고는 국제일본학 연구에 있어서나, 그 이외 분야의 연구에 있어서 대단히 의미 깊은 내용이었다.

【집필자: 스즈키 유스케 (鈴村 裕輔,

호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題」

第1回 研究会

- 日 時：2010年5月29日(土) 10:00～17:00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）

平成22年度文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業に採択された、国際日本学研究所研究プロジェクト「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の現在・過去・未来」のアプローチ②：近代の〈日本意識〉の成立「日本民俗学・民族学の問題」では、5月29日(土)に第1回研究会を開催した。全体のテーマは明治維新以降、19世紀及び20世紀を通じた約140年間の日本の民族学・民俗学の日本意識の形成への貢献である。そのなかから最も重要と思われる一つの時期である1930年代から1950年代にかけての30年間の研究として取り上げることとした。

この第1回研究会には、本学から4名、北海道大学、早稲田大学をはじめとする国内の研究機関から7名、そして韓国、台湾の研究機関から2名の研究者が出席し、具体的な研究テーマとプロジェクト参加者の共同研究の基礎を創るための自由な討論を行った。この研究の中心となるのは、民族学、民俗学、社会学、歴史学（近現代史・思想史）の学際的なアプローチである。

討論によって、以下の学史上の重要な転換期が確認された。

まず昭和9年・昭和10年は、澁澤敬三を中心とする民族学会の設立と、柳田国男の還暦を機とした日本民俗学講習会での民間伝承の会の設立があり、民族学・民俗学の大きな転換期となった。ただこの二つの学問分野の目的や研究方法は、その時点では明確に分かれてはいなかった。当時の日本の帝国主義のもと、植民地民族学や一国民俗学は、台湾における『民俗台湾』、朝鮮における『朝鮮民俗』の定期的な刊行、そして、柳宗悦が推進する民芸運動では、アイヌ、沖縄、朝鮮の民芸が対象とされ、複雑な展開をしていく。戦時中は軍が南洋、東南アジア、中国などへの進出に民族学を援用するようになり、東京には民族研究所、台北帝国大学でも民族学の調査・研究がさかんになった。

戦後、諸外国、中国、旧満州、主に旧京城帝国大学と旧台北帝国大学の民族学・民俗学研究者が内地日本に戻り、二つの学問の日本国内の発展に大きく貢献し、新たな転換期をもたらした。また同時に、GHQのCIE教育情報部がアメリカの文化人類学を導入し、何人かの日本人の社会学・民族学・民俗学の研究者が村落調査に動員された。ルース・ベネディクトの『菊と刀』が日本語訳され、石田英一郎や泉靖一のアメリカでの経験をふまえて文化人類学が日本にもたらされ、東京大学に居所ができた。しかし、まだその当時は、文化人類学は主流ではなく、むしろ岡正雄をはじめとする歴史民族学が主流であった。岡の1933年ウィーン大学での卒業論文をもとに昭和23年に東京・神田で「日本民族の起源」を取り上げる学際的な研究会が開催され、東京都立大学、明治大学に社会人類学・文化人類学の講座が設置された。アイヌ研究では、戦前の千島調査、戦後の沙流谷調査があった。しかし、アイヌについてはある意味あまり表立つ研究がみられず、沖縄研究が重要視された。柳田の民俗研究所は、民族学との競合のなかで学問的に展開するには及ばず、閉鎖となった。柳田は1961年、その一生の研究のまとめとして『海上の道』を著した。

これら学問上の転換期のなかからいくつかのテーマを選択し、グループをまとめ、9月25日・26日の二日間にわたる第2回研究会を設定することが決まった。第2回研究会では、それぞれの研究報告と討論を行う。なお、第2回研究会には、アメリカ・スタンフォード大学のハルミ・ベフ先生とドイツ・ボン大学のオイルシュレーガー先生も出席する。今年度の研究の総括として、12月11日・12日に学際的かつ国際的なシンポジウムを法政大学において開催することが決定した。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー
（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）】



参加者のプロジェクトメンバー
後段左より：黄智慧氏、川村湊氏、安孫子 所長、山本真鳥氏、近藤雅樹氏、石井正己氏、桑山敬己氏、
前段左より：全京秀氏、ヨーゼフ・クライナー アプローチリーダー、川田順造氏、崔吉城氏、伊藤亜人氏



研究会の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 2 Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’: Issues of Folklore Studies and Ethnology

1st Research Meeting

Date: Saturday, 29 May 2010, 10:00-17:00
Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair: Josef KREINER (Professor and Special Adviser, Hosei University for International Japanese studies, Planning and Strategy Division)

To mark the start of “Approach 2 Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’: Issues of Folklore Studies and Ethnology”, the first research meeting was held on Saturday, 29 May. The overall theme is the contribution to the formation of ‘Japan-consciousness’ made by Folklore Studies and Ethnology since Meiji in 19th and

20th centuries. Research during the opening year focusses on the period from the 1930s into the 1950s, which is considered one of the most important periods.

13 researchers from in and outside Japan as well as from this university participated in the first research meeting, and held a free discussion on creating a base for joint research. Central to the research will be an interdisciplinary approach of Folklore Studies, Ethnology, Sociology, and History (Modern History, History of Thought).

As a result of the discussion we had in our vision the directions of cultural anthropological research carried out during that period in Korea, Taiwan and wartime Southeast Asia, the methodology introduced from the West, and also the influence upon neighbouring countries including China. We analysed the themes in detail, and laid the ground for the next research meeting.

Report by: Josef KREINER (Professor and Special Adviser, Hosei University for International Japanese studies, Planning and Strategy Division)

战略性研究基盤形成支援事業「基于国际日本学方法论的日本意识再探讨－日本意识过去，现在，将来－」
研究課題 2 近代日本意識の成立－有关日本民俗学－民族学の問題

第1回 研究会

日 期：2010年5月29日（星期六）10:00-17:00
会 場：法政大学市谷校区58年館2楼，国际日本学研究所演習室
持会议：约瑟夫 库拉伊纳（法政大学日本学研究所兼任所员、法政大学国际战略据点特聘教授）

本次研究会的综合主题是，探讨19世纪以及20世纪的日本民族学・民俗学对于日本意识的形成所作出的贡献。具体的时间跨度设定为1930年代到1950年代。

本校以及国内外专家共计13名，出席了本次研究会。专家们从民族学，民俗学，社会学，历史学（近現代史/思想史）等学科领域，对本次大会的主题进行了自由的讨论。

大会针对，1930年代到1950年代这段时期内，出现在朝鲜，台湾以及战争中东南亚等地域的文化人类学研究动向，具体的研究方法，及其对于中国大陆，和周边邻国所产生的具体影响等一系列问题进行了热烈而详细的讨论。可以说，专家们对于这些主题的分析，为今后的日本意识的探讨打下了扎实而良好的基础。

【执笔者：约瑟夫 库拉伊纳
（法政大学日本学研究所兼任所员、法政大学国际战略据点特聘教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 「국제일본학 방법에 기초한 <일본 의식> 재검토－<일본 의식> 의 과거・현재・미래」
 연구② 근대 <일본 의식> 의 성립－일본민속학・민족학의 문제

제1회 연구회

일 시：2010년 5월 29일 (토) 10:00 ~ 17:00
장 소：호세이대학 (法政大学) 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사 회：요셉・클라이너 (호세이대학 국제일본학연구소 겸담 소원・특별 교수)

이번에 채택된 「연구②：근대 <일본 의식> 의 성립－일본민속학・민족학의 문제」 프로젝트는 5월 29일 (토) 에 제1회 연구회를 개최했다. 전체 테마는 메이지유신 (明治維新) 이후, 19세기와 20세기에 걸쳐 일본 의식이 형성되는 과정에 있어서 일본민속학・민족학의 공헌

에 관한 것이다. 그 중에서도 가장 중요한 시기로 생각되는 1930년대부터 1950년대까지의 시기를 연구 초년도의 연구 대상으로 선택했다. 제1회 연구회에서는 본교를 비롯해 국내외 13명의 연구자가 참석하여 공동연구의 기초를 마련하기 위한 자유로운 토론을 가졌다. 민족학, 민속학, 사회학, 역사학(근현대사・사상사) 을 학제적으로 어프로치 하는 것이 연구의 중심이다.

토론을 통해서 이 시기에 조선과 대만, 혹은 전쟁 중 동남아시아 광역에서 진행된 문화인류학적 연구 동향과 서양에서 수입된 방법론뿐만 아니라 중국을 비롯한 근린국에 미친 영향 또한 시야에 넣어, 테마를 자세하게 분석하여 다음 연구회의 토대를 마련했다.

【기사 집필：요셉・클라이너
（호세이대학 국제일본학연구소 겸담 소원・특별 교수）】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第1回東アジア文化研究会

「中国：党をアナトミーする」

The Anatomy of CCP; Deepening Dusk or Breaking Dawn?

● 報告者：菱田 雅晴（法政大学法学部教授）

● 日 時：2010 年 4 月 27 日（火）18：30～20：30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

果たして、改革開放政策の進展によって執政党としての中国共産党の統治は危機の様相を強め、党の存続そのものが危殆に瀕しているのか、それとも逆に経済成長に伴う変化を所与の好機として、この世界最大の政党にして最大規模の利害集団はその存在基盤を再構築し、新たな存在根拠を強固なものとしつつあるのか？

本報告では、中国共産党を「組織」として把握した上で、前者の立場を「黄昏（＝ダスク）ポジション」、後者の見方を「黎明（＝ドーン）ポジション」とそれぞれ名付け、組織論の各分析要素に従い、その変容の位相を瞥見し、社会的存在としての党組織の現況を再検討した。

具体的には、外部環境（国際環境、歴史環境、組織イメージ）、組織目標（理念、イデオロギー）、組織構造（党細胞、党支部）、組織活動（党課教育、政治学習）、そして組織成員（規模、メンバーシップ、プロフィール、入党動機）等を解剖部位としたが、先ず、外部環境の側面からは、“領導核心”作用の揺らぎを指摘した。かつて、プレ革命期における対抗性、地下性を基調とする中国共産党が「執政党」となり、ピラミッド型全国組織の組織構造と、「档案」に象徴される情報の一元的管理および計画経済に代表される中央集権制度によって担保されて来た「党の一元化指導」＝“領導核心作用”が今日の改革期を迎え、社会主義の教典像への逡巡とイデオロギー不信が黨員層にすら浸透している。イデオロギーの失効であり、替わって日常感覚レベルでの社会主義像、実利的な社会主義イメージが擡頭している。この結果、この組織の磁力、磁場は急減衰している。

更に、組織構造では、改革開放の“新生事物”としての私有制セクターなどに党細胞組織の“真空”が生まれており、且つ既存の党組織における活動も「党課教育」への参加、党費納入という組織成員義務においても停滞の色が濃い。

組織とは、ある特定理念、価値の実現を目標としてひとびとが糾合するものと把握するならば、この組織の組織目標は、党章＝党規約に見出すことができる。党の「（最終）目的」／「最終目標」、「最高理想」として掲げられるものが、「共産主義（制度）、社会主義の実現、共産主義の社会制度の実現」等と変遷を重ねており、「社会主義社会は必然的に資本主義社会にとって替わる」との従来ラインは第 16 回党大会において削除されるなど、組織目標の“揺らぎ”も看取される。

その上で、7593.1 万人（2008 年末現在）という世界最大規模の政党、政治組織（対総人口吸収率 5%）にして、且つ国内最大規模、ベスト＆ブライテストの利益集団というこの組織の成員構造を見ると、メンバーシップにおける代表性如何が疑問視される。入党時期別構成、年齢構成あるいは職業階層構造において、歪みが顕著となっている。このため、「発展黨員」という名の新規リクルートは、若年層、高学歴層、テクノクラート層、すなわち、改革開放レースの「勝者」グループに集中している。また、ひとびとの入党動機も、実利的な目標への集中傾向が明白となっている。

従って、「3 つの代表」論による党自身の大変容も、包括政党化どころか、この政治組織の伝統的支持基盤たる労働者、農民層を切り捨て、エリート階級政党化への途を拓くものと解される。既得権益層としての権精英 Power Elite、錢精英 Money Elite の権益代表を目指すことでサバイバルを図ろうとしている。

これらの諸側面は、「黄昏ポジション」、「黎明ポジション」双方からそれぞれ評価可能であるが、本報告では、後者に傾いた判断を示した。というのも、第一に、党自身がこの変容＝“組織危機”に関して、一貫して積極的なアクターであったという点は強調されねばならない。この組織は、不知不識裡にこの“危機”状況に巻き込まれた訳では決してなく、現時点弥縫策を求めて右往左往している訳でもない。寧ろ、この変容過程を自ら慎重且つ積極果敢にリードし、コントロールして来た。予防的に、“異議申し立て者”＝反対勢力の伸張を封殺して来た予防的サバイバル戦略が展開されており、潜在的な反対勢力をも内部へと取り込み（co-opt）、抱き込む（embrace）とするこの戦略はこれまでのところ、大きな成功を収めている。

第二に、潜在的な“異議申し立て者”＝反対勢力自身とて、明確に現体制の一部をなしており、決して外部から現体制に対抗する“チャレンジャー”ではない。政治変革は意識の多元化に伴う追求すべき政治価値の相違から発生するのが常ではあるが、少なくとも現段階、政治的価値志向の大きな分岐は見られない。

とはいえ、政治変動は、経験則に従い、何らかの予兆を伴い、その累積の上に、予定調和的に発生するものではない。変容は如何なる経済発展段階でも発生していることは銘記しておかねばならない。

【記事執筆：菱田 雅晴（法政大学法学部教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based
on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-
consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 Present-day ‘Japan-consciousness’:
in East Asia

1st East Asian Culture Research Meeting of 2010

“The Anatomy of CCP; Deepening Dusk or Breaking Dawn?”

Presenter: HISHIDA Masaharu (Professor, Hosei University
Faculty of Law)

Date: Tuesday, 27 April 2010, 18:30-20:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Research Center for International Japanese
Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research
Center for International Japanese Studies)

Do we find the rule of the governing party, the
Communist Party of China, in a worsening crisis phase, or
on the other hand, is it in the process of re-inventing itself?

This report considered the Chinese Communist
Party as an “organization”, and viewed the former as the
“deepening dusk position”, and the latter as the “breaking
dawn position” in the above question. Following the lines
of theory of organizations, we looked at the phase of
apparent change, and carried out an analysis of the present
state of the party organization.

The report gave a judgment siding on the latter
view. Evidence for this being that the organization did not
become unknowingly entangled in this “crisis” situation,
and was not seeking stopgap measures amidst a confusion.
Rather, it is leading itself through the change process
with prudence and positive resolution, and is unfolding a
defensive survival strategy of forcing out “objectors” or
expansion of oppositional power, at which it has been most
successful. As a result, any latent oppositional power has
clearly become part of the present administration, and is
in no way an external challenger.

Report by: HISHIDA Masaharu (Professor, Hosei
University Faculty of Law)

战略性研究基盤形成支援事業「基于国际日本学方法论的
日本意识再探讨－日本意识过去，现在，将来－」
研究课题3 日本意识的现在－从东亚入手－

2010年第1回，东亚文化研究会

剖析中国共产党

报告者：菱田 雅晴（法政大学法学部教授）

日 期：2010年4月27日（星期二）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区58年馆2楼，国际日本学研
究所演習室

主持会议：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

作为执政党的中国共产党的统治到底是日落西山还
是蒸蒸日上呢？

本次报告，将中国共产党作为一种「机构」来看待，将
前一种情况视为“黄昏职位”，将后一种情况作为“黎明职位”。
并遵照机构原理，来简单考察其变化过程，同时剖析其现状。

通过剖析，报告者更倾向于后一种情况，即“黎明职
位”。其原因在于，这个机构绝对不会在毫无防备的情况下
卷入“生存危机”，也不会为寻求摆脱危机的方法，而显得
惊慌失措。与之相反，面对各种各样的变化，这个机构
始终慎重并且积极果断地发挥着导航的作用，并且能够
前瞻性地预判并消除那潜在威胁，即破坏机构的反动势
力。这种具有前瞻性的生存战略取得了很大的成功。其结
果，使那些潜在的“异议者”演变成为了机构的一部分，从
而在机构的外部，无法出现能够与之对抗的挑战者。

【执笔者：菱田 雅晴（法政大学法学部教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업「국제일본학 방법에 기초한
〈일본 의식〉 재검토－〈일본 의식의 과거・현재・미래〉
연구③ 〈일본 의식〉의 현재－동아시아를 기점으로

2010년도 제1회 동아시아문화연구회

「중국：당（党）을 해부한다」

The Anatomy of CCP; Deepening Dusk or
Breaking Dawn?

보고자: 히시다 마사하루 (菱田 雅晴, 호세이대학 (法
政大学) 법학부 교수)

일 시: 2010년 4월 27일 (화) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이대학 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스 58년관
2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민 (王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

과연, 집정당으로서의 중국 공산당 통치는 심각한 위
기 양상을 띠고 있는가, 아니면 반대로 당의 존재 기반
을 재편하고 있는가?

이번 보고에서는 중국 공산당을 「조직」으로 파악하
여 전자를 「황혼 포지션」으로, 후자를 「여명 포지션」
으로 설정하여 조직론에 의거해 변용의 위상을 간단히
살펴보고, 정당 조직의 현황을 해부했다.

이번 보고에서는 후자에 편중된 판단을 제시했다. 그
근거로는 우선, 그 조직은 결코 부지불식간에 「위기」 상
황에 휩싸인 것이 아니며, 미봉책을 강구하기 위해 우
왕좌왕하고 있는 것도 아니라는 점을 들 수 있다. 오히
려 이러한 변용 과정을 스스로 신중하고 적극적으로 과
감히 리드하고 있으며, 예방적으로 “이의 제기 자” = 반
대 세력의 신장을 봉쇄하는 예방적 서바이벌 전략을 전
개하고 있으며 큰 성과를 거두었다. 그 결과, 잠재적인
반대 세력이라 할지라도 스스로 현 체제의 일부로 확실
하게 편성되어 있으며 결코 현 체제에 대항하는 외부적
“도전자”는 아니기 때문이다.

【기사 집필: 히시다 마사하루 (菱田 雅晴, 호세이대학 법학부 교수)】



研究会開始挨拶：王教授（左）、
菱田教授（右）



菱田教授



研究会の様子

2010 年度第 2 回東アジア文化研究会

日中和解と、東アジア共同体 —欧州に学ぶ「4 つの和解」

● 報告者：羽場 久美子（青山学院大学国際政治経済学部教授）

● 日 時：2010 年 5 月 31 日（月）18：30～20：30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

2009 年 9 月に東アジア共同体を鳩山政権が打ち出して以来、2010 年は秋に APEC 首脳会議が日本で、ASEM の国際会議がブリュッセルで開かれることもあり、にわかにアジアの共同も現実味を帯びてきた。既に 2000 年には経団連の「奥田レポート」がアジアとの共同を打ち出し、2002 年にはシンガポールで小泉首相も「東アジア共同体」を打ち上げた。

2009 年に鳩山政権が宣言した「東アジア共同体構想」は、2010 年 6 月の首相の交代以降、「東アジア共同体超党派連合」が結成されたにも拘らず、日米同盟再編にかき消されて下火気味だが、経済が大きく転換しつつある今こそ、本格的に東アジアの共同について考える時期であろう。

報告では、欧州統合からみた東アジア共同体への問題提起として、欧州統合の 2 つの誤解、今進めるべき「4 つの和解」に関し、お話しさせて戴いた。

欧州統合の 2 つの誤解とは、①欧州は均質で仲が良いから統合が実現できたが、アジアはあまりにも多様であり統合は無理、②「和解」は有る程度均質で対立のない状態でなければ実現不可能というものである。

欧州は、65 年前、第二次世界大戦の結果だけ見ても、アジアの 2 倍近い 3000 万に及ぶ人が死んでいる。ナチスのホロコーストは 600 万人と言われる。その 10 年後に屍を越え「独仏和解」による統合が行われた。大した決断である。日中敵対の原因となっている南京虐殺は 30 万人（日本側では 5-6 万という意見もある）。その後 60 年間戦争はないものの未だわだかまりや敵意は残る。

「欧州が均質で戦争をしない」状態になったのは、戦後の「不戦共同体」としての地域統合以降、高々 50 年にすぎない。それはまさに統合と和解の成果なのだ。

第 2 の誤解は「和解」の語感・意味である。和解とは、「仲良くすること」ではない。それは「戦争状態と敵対を修復する」意味だ。「仲が良いから」和解するのでなく、「戦争や敵対状態の修復」が和解である。その意味で欧州の「和解」「平和」と日本語の語感は大きく異なる。「平和」は日本では、青空に鳩が飛んでいて人々がゆったり幸せをかみしめるイメージ。他方欧米では平和を作る（Peace Making）ことは、戦争状態に終止符を打つために外交・軍事行動を起こすことだ。Peace Making は、紛争・戦争をしている二つの対立・抗争地域に、武器を持って割って入ること、Reconcile は、虐殺と戦争を起こした当事者同士の関係を修復することなのだ。

「独仏和解」とは、3000 万人の戦死者、600 万人のホロコースト死者を踏まえて、それを悼み「虐殺と敵対の修復」が戦後 10 年で行われたことだ。その背景にソ連の脅威があったにせよ。南京虐殺は、ナチスの蛮行の 20 分の 1、100 分の 1 の死者。でありながら 60 年以上たっても歩み寄りはなく敵対は修復できない。

それは「違いすぎるから」以上に、修復の意思及びアメリカの意図と関係している。

ソ連に対抗するための独仏和解と地域統合。ソ連・中国に対抗するための分断。

冷戦の影が、欧州の統合とアジアの分断を作りだした。しかし冷戦終焉 20 年で欧州さらには世界で大きく地域統合が進む中で、未だ日中韓は冷戦の影を引きずり、世界最大の経済成長区であるにもかかわらず「政冷経熱」の状態がつづいている。何とか打開できないものだろうか。

東アジアで、米欧に並ぶアジアの統合はできるか。何よりもグローバリゼーションと中国・インドの成長が、日本に（あるいは世界に）中国・インドそしてアジアの発展地域と結ぶ必要を促している。今や統合に気乗りのしない日本抜きで、アジア大陸地域統合と経済発展のシナリオも表れている。こうした中で、日本の課題は、歴史問題・政治問題を超えて、世界を見据えつつ、東アジアの地域統合に参加していくことに長期的な利益を見出さざるを得ないであろう。

欧州は、3000 万の死者を出した第二次世界大戦を超え、50 年にわたる欧州の分断を超えて、冷戦終焉後いかにして欧州全域の統合を達成したか。その背景にあるのが、4 つの和解である。

4 つの和解とは、①「独仏和解」、②「異体制間和解」、③「階層間和解」、④「異文化間和解」である。①「独仏和解」以外は、すべて冷戦終焉後、実行されたものである。

第 1 の独仏和解は、戦術としての冷戦の産物であった。冷戦後の独ポーランド和解、独口和解は、さすがに困難を抱えつつ、ドイツは粘り強くそれを実行しているように見える。独米同盟を維持しながら。その目的は地域の安定と共同、それによる反映である。

第 2 の「異体制間和解」は、元社会主義地域たる、旧ソ連・東欧諸国との和解である。これは冷戦終焉後 15 年かけて、中・東欧諸国を欧州の法・政治・経済システムに合わせ EU に取り込む作業であり 2004-7 年に 14 カ国が EU に加盟した。同様にロシアとの「異体制間和解」、近隣諸国政策は、欧州に石油天然ガスのメリットをもたらした。

第 3 の「階層間和解」は、冷戦終焉後広がったエリートと市民間の格差の拡大をいかに修復するかという問題、第 4 の「異文化間和解」は、移民に象徴されるような域内のマイノリティ、とりわけイスラム系移民と一般市民との社会問題をいかに調整するか、という問題である。これら 3 つの和解は、「独仏和解」以上に、現代アジアの地域協力への解決の示唆を示している。

現在アジアには、ASEAN + 3, 6, 8, 10 や、ARF, APEC, SCO, SAARC, ASEM など、重層的で多元的な、幾重にも広がる、10 を超える機能的な地域統合組織が、既に存在する。「アジアの地域統合」は一つでなく、

既に「ある」のである。それをいかに実質的なものとして活用するかを考えると、其々の機能に応じた多元的組織をよりよく運用するための実質的な会合および達成目標を提示する必要がある。

また最大の歴史的・政治的な問題たる日中問題の解決にむけ双方が歩み寄りの努力を開始することは、最大の課題となろう。経済から政治と社会の歩み寄りへ。それによってこそ、アジアは、グローバル化・グローバリゼーション下の三極構造の中で、米欧に匹敵しそれを凌ぐ繁栄を共に享受することができる。

今や G2 (米中)、G3 (米欧中)、G20 (新興国の決定参加) がアメリカ、欧州のトップ・エリートの思惑・政策を支配する。日本が日米同盟にしがみついている間に、当のアメリカと欧州は、変わらない日本を踏み越え明らかに中国との連携に向かっていく。世界経済は冷戦終焉 20 年と、金融危機のもと、BRICS ないし、BICS (ロシア以外) に雪崩を打って接近している。中印との連携はもはや世界で当然の課題である。

東アジアの統合は経済統合を基礎に、やれる所から、と言われてきた。その通りである。

そして既に経済統合は既にやれるところまで進んでいる。次の段階は「日中和解」、「歴史的な敵との和解」による共同の繁栄なのだ。まずは首脳的共同宣言と和解宣言。次いで知識人レベルの共同会議。経済界の制度化、標準化の試み、さらに市民間の協力・交流。詰めと折衝は後からでもよいのだ。

今や世界で最も繁栄するアジアの共同は、世界経済の安定化と繁栄への主体的参加でもある。

G2,G3 体制という、「覇権」を競う 21 世紀に終止符を打ち、地域の共同と繁栄に道筋をつけ和解を促進するためにも、東アジアの地域協力、日中和解、歴史問題解決への政・産・学・社、4 様における、速やかかつ緩やかな共同が求められよう。

【記事執筆：羽場 久美子

(青山学院大学国際政治経済学部教授)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 Present-day ‘Japan-consciousness’ in East Asia

2nd East Asian Culture Research Meeting of 2010

Japan-China Reconciliation and the East Asian Community: “4 Points of Reconciliation” to be learnt from the European Union

Presenter: HABA Kumiko (Professor, Aoyama Gakuin University School of International Politics, Economics and Communication)

Date: Monday, 31 May 2010, 18:30-20:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

In September 2009, in a historic general election, the Liberal Democrats gave way to the Democratic Party's Hatoyama Government. Its first slogan was “Building an East Asian Community”. Since then, we have seen action in regions of East Asia including Japan.

China and surrounding countries reacted quickly

to the proposal, and President Obama showed interest in cooperation with East Asian Pacific regions. However, actual details of plans were never made clear.

The Democratic Party's administration was not solid, and Okinawan Futenma Base problems resulted in change from Hatoyama to Kan. Meanwhile the “East Asian Community Ministerial Confederation” was formed, but there is no telling whether such government plans will progress.

Seeing dark clouds over the European financial world symbolised by the Greek crisis, Japan's attitude towards its own regional community continues to be noncommittal.

However, with the East Asian “cold war” at an end, and the Asian community growing, we urgently need “Japan-China reconciliation” on both governmental and popular levels through a prosperous economic community.

The present sees the “decline” of Japan and US, the rise of China, and action from G20 with murmurings of G2 (US-China) or G3 (US-EU-China). An East Asian regional union based on “Japan-China-Korea reconciliation” – with ASEAN at its core – is essential for Japan's future survival within a globalised East Asia.

By learning from the history of separation and union in post-war and post-Cold War Europe, we should pursue the “East Asian regional cooperation” group already in existence.

Report by: HABA Kumiko (Professor, Aoyama Gakuin University)

戦略性研究基盤形成支援事業「基于国际日本学方法论的日本意识再探讨－日本意识过去，现在，将来－」
研究内容 3 日本意识的现在 - 从东亚入手 -

2010 年第 2 回，东亚文化研究会

日中和解与东亚共同体

－ 欧盟的「四个和解」所带来的启示

报告者：羽場 久美子（青山学院大学国際政治経済学部教授）

日 期：2010年5月31日（星期一）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区58号館2楼，国际日本学研究所演習室

主持会议：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

2009年9月，经过历史性的选举，民主党鸠山政权登

上了历史舞台。鸠山政权的最初的口号便是「东亚共同体设想」。然而对于「东亚共同体设想」的具体内涵，至今尚不明朗。

民主党政权并没有达到坚如磐石的地步，在冲绳普天间基地的迁移问题上的举步维艰直接导致了鸠山政权向菅政权的更替。而在此过程中，「东亚共同体议员联盟」虽被创设，但无法预知政府主导的「东亚共同体设想」在今后能否得到顺利进展。

随着东亚间「冷战」的结束，在日益发展的亚洲各国间，通过政府以及国民两个不同层面的和解，实现经济的共同繁荣才是真正的当务之急。因此，吸取欧盟的历史经验，探索多层次・多元化的东亚地区合作，毫无疑问是日本立足于东亚地区的行之有效的方法。

【执笔者：羽場 久美子（青山学院大学国際政治経済学部教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업「국제일본학 방법에 기초한
〈일본 의식〉 재검토-〈일본 의식〉의 과거・현재・미래」
연구③〈일본 의식〉의 현재-동아시아를 기점으로

2010년도 제2회 동아시아문화연구회

일중 화해와 동아시아 공동체

—유럽 통합으로부터 배우는「네가지 화해」

보고자: 하바 구미코(羽場 久美子, 아오야마학원대학
(青山学院大学) 국제정치경제학부 교수)

일 시: 2010년 5월 31일(월) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 58년관
2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

2009년 9월, 역사적인 총선거에서 자민당 정권이 붕괴하고 민주당의 하토야마(鳩山) 정권이 발족되었다. 하토야마총리는 정권의 최초 슬로우건으로「동아시아 공동체 구상」을 내세웠다. 이후, 일본에서도 동아시아 지역공동체를 위한 움직임이 활발해졌다.

하토야마총리의 제안 후, 주변국이나 중국의 움직임도 신속해졌으며, 또한 미국의 오바마대통령이 동아시아 태평양 지역 협력을 표명한 이래로「동아시아 공동체 구상」은 일미동맹을 배려하는 가운데 어느 정도 추진되었다.

단, 구체적 내실에 관해서는 아직 확실하지 않다.

민주당 정권은 견고하지 않다. 또한 오키나와(沖縄)

후텐마(普天間) 기지 이전 문제가 난항을 거듭한 결과 하토야마 정권에서 간(菅) 정권으로 이행하는 과정에서「동아시아공동체 의원연맹」이 창설되었는데, 정부 주도 동아시아 공동체 구상이 진전될 것인지 아닌지에 관해서는 예측하기 어렵다.

한편, 그리스 위기로 상징되는 유럽 금융계 암운의 결과, 원래 지역 통합에 찬성하지 않았던 일본이 지금은 지역 공동체에 대해 엉거주춤한 태도를 취하고 있다는 느낌도 든다.

그러나 동아시아에서「냉전」을 종식시키고, 나날이 성장하고 있는 아시아 안에서 우선은 적대감을 넘어 공동 번영을 실현한 다음, 정권 담당자와 국민 레벨의 쌍방에 의한「일중 화해」와 그에 따른 경제적 공동과 번영의 구축이 급선무일 것이다.

일본이나 미국이「쇠퇴」하고 중국이 대두했으며, G2(미국, 중국), G3(미국, EU, 중국)가 내밀히 협의하여 G20가 움직임을 시작한 현재, ASEAN을 핵으로 하여「일중화 화해」를 기축으로 한 다원적인 동아시아 지역 통합은 일본이 앞으로 글로벌화된 동아시아에서 살아가기 위해서도 불가결하다.

전후와 냉전 후 유럽의 분단과 통합의 역사를 교훈으로 삼으면서,「이미 존재하는」중층적・다원적「동아시아 지역 협력」의 연계 가능성을 추구해야 한다.

【기사 집필: 하바 구미코

(羽場 久美子, 아오야마학원대학 국제정치경제학부 교수)】



羽場久美子 教授



安孫子 所長(左)、王敏 教授(右)



熱心に聞き入る会場の様子



豊富な資料で説明される羽場教授

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第 3 回東アジア文化研究会

原点としての儒教的家父長制、そして狂気と異端

—梁石日の『血と骨』を中心に—

● 報告者：金 煥基（法政大学国際文化学部客員研究員、韓国東國大學文科大學日語日文學科副教授）

● 日 時：2010 年 6 月 22 日（火）18:30～20:30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：高柳 俊男（法政大学国際文化学部教授）

本発表は戦後在日コリアン文学の民族的グルスギ、民族から脱民族へ、脱民族的グルスギの流れで、梁石日の代表作（『血と骨』、『夜を賭けて』など）に見られる原点としての儒教的価値観の文学的意味を考察するのが目的である。

まず、梁石日の『血と骨』、『祭祀』には特に儒教的価値観（家父長制、伝統意識、男尊女卑、孝道概念）が目立つ。例えば「女に教育を受けさせるとろくなことはない」、「雌鳥が啼くと家が滅ぶ」、「祭祀をおろそかにする人間は最大の不孝子」、「血は母より受け継ぎ、骨は父より受け継ぐ」などの発言がそれである。しかし梁石日の小説は強力な無頼漢の狂気と異端という破格的な行歩を通じて既存の価値観を覆し、裸になったまま負性と向き合う。瘠薄な周辺環境と底辺の生の形象化（女性遍歴、暴力、賭博、殺人、麻薬）がそれである。言わば「人間を喰ったフカで蒲鉾」を作る。暴力団との小競り合いで吳漢淳の耳を噛みちぎって「その耳を奥歯で咀嚼して食べて」しまう。「わしの金を喰う奴は、わしの血を吸うのと同じだ」、「わしの金を喰う奴は誰であろうと許さん」と言いながら債務者に自分の血を飲ませる猟奇的な行動まで見せる。『夜を賭けて』でも「飢えは警察よりも砲弾よりも死よりも恐ろしい」という被差別人の意識を通じて、大阪の兵器製造場で鉄屑を拾う「アパッチ族」の苦しい生存闘争現場が告発される。

ディアスポラ文学が「自国でない異国で定着して生き残るまでの刻苦の艱難史、位置性、他者との妥協と非妥協、調和と不調和の関係を文学的に省察」したものだとなれば、植民地時代と戦後の在日コリアン文学の植民 / 被植民、主流 / 非主流というイデオロギー的二項対立、あるいは異邦人の民族意識、疎外意識、窮乏な生活描写はディアスポラ文学と言ってよい。そして『血と骨』の無頼漢の逆走行は少数者の艱苦な生存闘争に対する告発、民族意識と普遍的価値の追求、ディアスポラの心の奥底からの慟哭の声と言える。

『血と骨』に形象化された金俊平の狂気と異端の世界（超越性）の文学的意味は、1) 基本的に時代・歴史的な認識がはっきりしており儒教的な価値観をもとにしていると言える（「朝鮮人」たちの抵抗、労働者の集団行動、民族意識と帰国運動など）。2) 金俊平の狂気と異端は当時の植民 / 被植民、支配 / 被支配、主流 / 非主流、中心 / 周辺の力学関係が作り出した異邦人の鬱憤、怨恨、慟哭の身悶えである。3) 金俊平の極限的行動は金鶴泳文学の内向的な昇華とは異なる一種の「恨」の外向的な昇華である。4) 狂気と異端的世界には個人を超えた外部世界（他者）に向かった特別なメッセージが込められていると言える。結局、梁石日の小説で形象化される生存闘争の現場は被差別人の単純な艱難の意味を超え、主流 / 中心に対する非主流 / 周辺の抵抗意識と文学的「アンチ」精神が強く内包されていると言える。そして主人公の狂気と異端の世界は在日コリアンの負性の表象であり、儒教的価値観に対するねじ曲げであり、克服と再生のための自己否定である。こうした文学的特徴は強力な力とカリスマ性に代弁される梁石日の小説の超越性とエンターテインメントの実体が確認できる支点でもある。

【記事執筆：金 煥基（法政大学国際文化学部客員研究員、韓国東國大學文科大學日語日文學科副教授）】

〔グルスギ〕：文章を書くこと、物語



金 煥基 副教授



高柳 教授



王 敏 教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project "Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future"
Research Approach 3 Present-day 'Japan-consciousness': in East Asia

3rd East Asian Culture Research Meeting of 2010

Confucian Patriarchy as Starting Point, and also Madness and Heresy: focusing on *Blood and Bones* by Yang Seok-il

Presenter: KIM Hwan-Gi (Guest Scholar, Hosei University Faculty of Intercultural Communication; Assistant Professor, Dongguk University Department of Japanese Language and Literature)

Date: Tuesday, 22 June 2010, 18:30-20:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: TAKAYANAGI Toshio (Professor, Hosei University)

This presentation aimed at identifying the Confucian values (patriarchy, sense of tradition, predominance of men over women, concept of filial piety) which served as the starting point for novels (chiefly *Blood and Bones*) by Yang Seok-il. It then considered the refusal of those

values and their inherent but distorted literary meaning. Firstly, Yang Seok-il's novels strongly negate Confucian values through the use of a barren environment and lowly, raw images (love affairs, violence, gambling, murder, drugs). This leads down the exceptional path of madness and heresy, overturning existing values, and confronting negativity in a naked state. The world of madness and heresy in *Blood and Bones* is the outsider's writhing with resentment, enmity and lament, created by the dynamic relation between the contemporary colonizer/colonized, ruler/ruled, mainstream/non-mainstream, centre/periphery, and it is an extroverted sublimation of a kind of "reproach". We can say that it contains a special message directed at the outside world surpassing the individual. In other words, scenes of the protagonist's extreme battle with existence surpass the meaning of the simple adversity of someone discriminated against, with strong connotations of a sense of resistance in mainstream/centre versus non-mainstream/periphery, and the literary "anti-" mind. This is a symbol of the negativity of Koreans in Japan, is a distortion of Confucian values, and is self-denial for the purpose of subjugation and rebirth.

Report by: KIM Hwan-Gi (Guest Scholar, Hosei University Faculty of Intercultural Communication; Assistant Professor, Dongguk University Department of Japanese Language and Literature)

战略性研究基盤形成支援事業「基于国际日本学方法论的日本意识再探讨 - 日本意识的过去, 现在, 将来 -」
研究课题 3 日本意识的现在 - 从东亚入手 -

2010 年第 3 回, 东亚文化研究会

儒家家长制, 疯狂与异端

—以梁石日的小说『血和骨』为中心—

報告者: 金 煥基 (法政大学国際文化学部客員研究員、韓国東國大學文科大学日語日文学科副教授)

日 期: 2010年6月22日 (星期二) 18:30-20:30

会 場: 法政大学市谷校区58年館2楼, 国际日本学研究所演習室

主持人: 高柳 俊男 (法政大学国際文化学部教授)

本次报告基于梁石日的小说『血和骨』中所反映的儒家价值观(家长制, 传统意识, 男尊女卑, 孝道), 来阐明拒绝这种价值观背后所蕴含的文学意义。梁石日在小说中, 通过对于生活在社会底层的人的疯狂和异端行为的具体描述(诸如男女关系, 暴力, 赌博, 杀人, 毒品), 来赤裸裸地推翻儒教的价值观。『血和骨』里所描绘的疯狂和异端的世界, 反映出作为一个异邦人的所怀有的郁闷, 怨恨心情, 同时这也是存在于人内心的怨恨对外的发泄和升华。其中, 蕴含着一种主流与非主流, 中心与周边的对抗意识。这种意识是旅日韩国人为了实现再生而作的自我否定。

【执笔者: 金 煥基 (法政大学国際文化学部客員研究員、韓国東國大學文科大学日語日文学科副教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업「국제일본학 방법에 기초한〈일본 의식〉재검토-〈일본 의식〉의 과거·현재·미래」
연구③〈일본 의식〉의 현재-동아시아를 기점으로

2010 년도 제 3 회 동아시아문화연구회

원점으로서의 유교적 가부장제, 그리고 광기와 이단

— 양석일의 『피와 뼈』(『血と骨』)를 중심으로 —

보고자: 김 환기 (金 煥基, 호세이대학 (法政大学) 국제문화학부 객원 연구원, 한국 동국대학교 문과대학 일어일문학과 부교수)

일 시: 2010년 6월 22일 (화) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이대학 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 다카야나기 도시오 (高柳 俊男, 호세이대학 국제문화학부 교수)

이번 발표의 목적은 양석일 소설(『血と骨』 중심)에서 형상화되는 원점으로서의 유교적 가치관(가부장제, 전통의식, 남존여비, 효도개념)을 확인하고, 그 유교적

가치관의 거부와 비틀기에 내재된 문학적 의미를 고찰하는데 있다. 우선 양석일의 소설에는 척박한 주변 환경과 밑바닥 삶의 형상화(여성편력, 폭력, 도박, 살인, 마약)를 통해 유교적 가치관을 강하게 부정한다. 이는 광기와 이단이라는 파격적인 행보를 통해 기존의 가치관을 뒤엎고 별거벗은 채로 부정(負性)과 마주하는 것이다. 결국 『血と骨』의 주인공의 광기와 이단의 세계는 당시의 식민/피식민, 지배/피지배, 주류/비주류, 중심/주변의 역학관계가 만들어낸 이방인의 울분, 원한, 통곡의 몸부림이고, 이는 일종의 '한'의 외향적인 승화이며 개인을 초월한 외부세계를 향한 특별한 메시지가 담겨있다고 할 수 있다. 결국 주인공의 극한적 생존투쟁의 현상은 피차별인의 단순한 간난의 의미를 넘어 주류/중심에 대한 비주류/주변의 저항의식과 문학적 '안티' 정신이 강하게 내포되어 있고, 그것은 곧 재일 코리안의 부정(負性)의 표상이고, 유교적 가치관에 대한 비틀기이며, 극복과 재생을 위한 자기부정이기도 하다.

【기사 집필: 김 환기 (金 煥基, 호세이대학 국제문화학부 객원 연구원, 한국 동국대학교 문과대학 일어일문학과 부교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

第一回勉強会

第二次大戦後の日本アニメ —手塚治虫の足跡—

- 報告者：サミュエル・カクゾロフスキー（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員・トゥールーズ第2大学博士課程）
- 日 時：2010年7月24日（土）15:00～17:00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

〈日本意識〉をテーマとする本研究所向こう5年間の研究が擁する四つのアプローチの第4は、「三角測量と〈日本意識〉—未来へ」と題されている。「三角測量」の「三角」はここでは、日本・西欧・アジアを指す。第4アプローチの今回の勉強会では、西欧の視点から〈日本意識〉を測量する作業が取り上げられた。

講師を務めたのは、昨秋、日仏博士課程コンソーシアム交換留学生として来日し、以来、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員として、「手塚治虫の映像作品と、その映画書法（エクリチュール）への影響」と題された博士論文を準備しながら1年を過ごしたサミュエル・カクゾロフスキー氏（トゥールーズ第2大学）である。この勉強会は、離日を前にした氏の1年間の手塚研究の成果発表会を兼ねるものともなった。

氏がまず強調したのは、今日の手塚治虫への評価が、マンガの仕事に向い、テレビ・アニメーションの仕事がとかく見逃される傾向があるということであった。氏によれば、そこには、テレビ・アニメーションが「リミテッド・アニメーション」であって、安価粗製の産物と見なされがちであること、加えて、アニメーションに関してはディズニーの影響力が圧倒的で、それを超えた

独自性など想像しがたいことが理由としてあるという。

しかし、技術的に見て、手塚以前から日本アニメはディズニー・アニメに比べて、決して劣るものではなかったし、手塚は、その下地の上で、ディズニー・アニメのよさもあくまでも自らのものとして咀嚼していったのである。しかもテーマとされた空想的未来文明（鉄腕アトム）は、外来物への従属ではなくて、他方で狭く国民的なものも超えた、独自に普遍的スタイルを創出したものだったのである。そしてこうした手塚の独創性の最大の証しが、新たな媒体であるテレビの可能性に賭ける形で、テレビ・アニメとして、アニメーションを産業的実験の場に導き入れたことだったと言える。テレビで毎週続き物としてアニメを放映すること自体が、テレビの制約をむしろ逆手にとって活かしていく、手塚独自の手法によって初めて可能となったのである。こうして、手塚は、日本的でありかつ同時に世界を席巻するまでに普遍的である、新たに日本的な、日本アニメを誕生させていったのである。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future” Research Approach 4 Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future

1st Research Meeting

Japanese Animations since the Second World War:

Presenter: Samuel KACZOROWSKI (Guest Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Doctoral Student, University of Toulouse II)

Date: Saturday, 24 July 2010, 15:00-17:00

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: ABIKO Shin (Director and Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Lecturer Samuel KACZOROWSKI arrived in Japan last autumn, and as Guest Researcher at Hosei University Research Center for International Japanese Studies, has spent the year preparing his doctoral thesis entitled “The screen works of Osamu Tezuka, and the influence upon their écriture”. This study meeting also served as an opportunity to present 1 year’s research results. Kaczorowski’s point of emphasis was that today’s critiques of Osamu TEZUKA focus on Manga, and tend to dismiss his television animation work. He contends that it was his introducing of animation, as television animation, to the realm of industrial experiment, that exhibited his greatest ingenuity. The art of showing animation on television in weekly episodes was first made possible by Tezuka’s method of animation, which uses the limitations of television to its advantage. Tezuka brought about Japanese animation that has Japan-like qualities, yet at the same time is universal having enraptured viewers the world over. In this way it proves newly Japan-like.

Report by: ABIKO Shin (Director and Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Faculty of letters)

战略性研究基盤形成支援項目「基于国际日本学方法论的
日本意识再探讨－日本意识的过去，现在，将来－」
研究内容 4 日本意识的三角測量－面向未来－

第一次学习会

二战后的日本动画－手冢治虫の足迹

報告者：塞缪尔格索洛夫斯基（法政大学国際日本学
研究所客員學術研究員・德鲁兹第二大学博
士研究生）

日 期：2010年7月24日（星期六）15:00-17:00

会 場：法政大学市谷校区58年馆2楼，国际日本学研
究所演習室

司 会：安孙子 信（法政大学国際日本学研究所教授）

塞缪尔格索洛夫斯基先生，于去年秋天来日，现作
为法政大学国際日本学研究所客員學術研究員，从事主题
为「手冢治虫对于影视作品以及电影笔法的影响」的研究。
本次报告，是其1年来的研究成果的一个总结。至今为止，
对于手冢治虫的评价往往集中于漫画，而往往忽视其在
卡通片领域的贡献。塞缪尔讲师认为，手冢的独创性最
能体现于卡通片的领域，其成功地将卡通片引入产业性
的实践之中。手冢的卡通表现手法，使卡通片能够像连
续剧那样每周得以连播。就这样，诞生了风靡世界，且
具有普遍性的新日本式的卡通片。

【执笔者：安孙子 信

（法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업「국제일본학 방법에 기초한
〈일본 의식〉 재검토－〈일본 의식〉의 과거・현재・미래」
연구④〈일본 의식〉의 삼각측량－미래를 향해
제 1 회 연구회

제 2 차 세계대전 이후의 일본 애니메이션－데즈카 오사무(手塚治虫)의 발자취－

보고자：사뮤엘・카크조로프스키(호세이대학(法政大学)
국제일본학연구소 객원 학술연구원・투르즈제
2대학 박사과정)

일 시：2010년 7월 24일(토) 15:00 ~ 17:00

장 소：호세이대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 58년관
2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회：아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본
학연구소 소장, 교수)

강사 사뮤엘・카크조로프스키씨는 지난 해 가을에 내
일하여 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원

으로 소속되어 있으면서「데즈카 오사무의 영화 작품과
영화 기법(에크리튀르)에 미친 영향」이라는 제목의
박사 논문을 1년간 준비해 왔다. 이번 연구회는 카크조
로프스키씨의 1년간의 연구 성과를 발표하는 발표회도
겸해서 이루어졌다. 카크조로프스키씨는 오늘 날 데즈
카 오사무에 대한 평가가 만화 제작에 만 집중되어 있어
서 텔레비전・애니메이션 작업은 간과되는 경향이 있다
고 강조했다. 카크조로프스키씨에 의하면 데즈카의 독
창성이 한층 발휘된 것은 텔레비전・애니메이션을 산업
적 실험의 장에 도입한 점이다. 텔레비전에서 매주 연속
물로서 애니메이션을 방영하게 된 것 자체가 텔레비전의 제
약을 오히려 역으로 활용한 데즈카의 애니메 수법에 의
해 처음으로 가능하게 된 것이며, 이렇게 해서 데즈카는
일본적이면서도 동시에 세계를 석권할 정도로 보편적인,
새로운 일본적인, 일본 애니메이션을 탄생시켰던 것이다.

【기사 집필：아비코 신

(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)】



サミュエル・カクゾロフスキー氏



左：安孫子 信 所長(司会、フランス語通訳)



説明するカクゾロフスキー氏



会場の様子

〈お知らせ〉

ニュースレター NO.13 翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

(中国語翻訳)

陳 毅立 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)

(韓国語翻訳)

申 惠蘭 (法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

国際日本学叢書 11

『異文化としての日本 ―内外の視点―』

序論（序文に代えて）

異文化としての日本 ―内外の視点― 王 敏

I 日中比較の視点による文化学の開拓

仏教受容の仕方から見た日中〔印〕の比較文化 植木 雅俊

「五・四運動」勃発原因と日本 王 虹

学問体系における「脱亜論」―福沢諭吉の儒学批判の論理― 周 程

共生・共存・共栄のための日中比較文化論

―異文化理解とコミュニケーションを中心に― 王 秀文

現代政治をめぐる「雑居的寛容」と「雑種文化」

―「相互理解としての日本研究」と国際理解教育のために― 大藪 敏宏

日中「松」のイメージの比較および文化学への解読

―『万葉集』と『全唐詩』を中心として― 張 石

芥川龍之介の『支那遊記』―意炳麟とのギャップを中心に― 魏 大海

II 多文化の中における日本文化論

日本文化再訪 ―多文化主義について― 加藤 周一

江戸文化研究は中国を必要としている ―欧米研究者を事例にして― 田中 優子

「日本を方法とする」日本学の新展開 楊 偉

明治日本の女子教育に対する津田梅子の貢献 ―“屋根裏部屋書簡”と関連文書を手がかりに― 陶 徳民（翻訳：王 童童）

日本浄土信仰の流れと法然の思想について 趙 仲明（翻訳：中野 英夫）

「天孫降臨」の真義 ―神話の文化学的研究― 李 国棟

詩人黄瀛の光栄 ―書簡性と多言語性― 岡村 民夫

III アジアの現代と日本の相関関係

文明・文化の新しい定義と東アジア 小倉 紀蔵

現代韓国における日本研究の変遷と動向 小針 進

東アジア諸国の同質性と多様性 光田 明正

日本化された台湾？中国化された台湾？あるいは日本化され中国化された台湾？

―文化マッピングと文化政策の弁証法的関係―（上） 王 向華・邱愷欣（翻訳：鈴木 裕輔）

植民地的「和解」のゆくえ ―戦後から七〇年代までの日本社会における霧社事件文学をめぐる一考察― 李 文茹



国際日本学叢書 12

2008年アルザス・シンポジウム報告『日本文化の中の天皇―天皇とは？』

国際日本学叢書 12『日本文化の中の天皇―天皇とは？』刊行にあたって 安孫子 信
L'émergence de la figure du souverain à la fin du VII^e siècle.

La complexité de la souveraineté de Tenmu. François Macé

「お印」について―日中の相違を中心に 王 敏

直き天皇から見えるもの 田中 優子

琉球王国の権力カリスマについての一考察 ―もう一人の『太陽の子』― ヨーゼフ・クライナー

幕末・明治期における天皇の肖像 相良 匡俊

“May I touch you?” The corporality of the emperor's person Josef KYBURZ

The Japanese Emperors as Seen on Japanese and Western Postcards, 1900-1945 Sepp LINHART

「哲学」と天皇制 ―西周の場合― 安孫子 信

和辻哲郎の象徴天皇制擁護論 星野 勉

中世における天皇について 河内 祥輔

古代天皇制の特質 ―その神聖性の淵源をめぐる諸研究― 小口 雅史



国際日本学叢書 13

2009年アルザス・シンポジウム報告『人体と身体性』

国際日本学叢書 13『人体と身体性』刊行にあたって 安孫子 信

叙述された身体 ―『平家物語』巻八「征夷將軍院宣」を中心に― 小秋元 段

日本近世における女性の身体に対する性的まなざし ―「あぶな絵」が示すもの― 小林ふみ子

The Body Silent Josef KYBURZ

Transformation as Monstrosity Monster Representations as Mirrors of Anxiety in

Traditional and Contemporary Japanese Visual Media Zilia PAPP

日本人はどのようにして西洋近代のリズムを身につけたか 相良 匡俊

Beyond the Japanese language: Communication and the human body Peter ACKERMANN

嘉納治五郎 身体と心 イブ・カドー

人体の使い方と自我意識の発達 川田 順造

能の所作の特徴を考える 山中 玲子・岩月 正見

西周と心身問題 安孫子 信

日本の生命倫理学における人の身体 クリスティアン・シュタイネック



文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業 学術フロンティア
「異文化研究としての〈日本学〉」サブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」研究成果報告書
『古代末期の境界世界 ——城久遺跡群と石江遺跡群を中心として——』
ヨーゼフ・クライナー 吉成直樹 小口雅史 (編)

サブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」の研究経過 ヨーゼフ・クライナー
古代末期の北と南 村井 章介

I 南の境界 ——喜界島・城久遺跡群
古代・中世期の南方世界 —キカイガシマ・交易・国家— 吉成 直樹
喜界島城久遺跡群の発掘調査 澄田 直敏
南西諸島の様相からみた喜界島 新里 貴之
列島南縁における境界領域の様相 —古代・中世の奄美諸島をめぐる考古学的成果— 高梨 修
城久遺跡群の日本古代中世における社会的地位 —津軽石江遺跡群との相違を含めて— 中島恒次郎
ヤコウガイ交易の二つの口と一つの口 —争点の整理と検討— 安里 進
琉球方言ハ行子音P音の素性をさぐる 中本 謙
補論1 日本の中の諸言語—アイヌ・ヤマト・琉球の言語生成— 間宮 厚司
補論2 『おもろさうし』の甕 福 寛美

II 北の境界 ——青森市・石江遺跡群
古代末期の北方世界—北方史グループの研究視角— 小口 雅史
青森市石江遺跡群の特質 木村 淳一
コメント1 青森市新田(2)遺跡(県教委担当分) 葛城 和穂
コメント2 新田(1)遺跡出土木簡の意義 渡辺 晃宏
コメント3 新田(1)遺跡出土の仏教関係遺物について 須藤 弘敏
コメント4 秋田県の古代木製祭祀具 —能代市樋口遺跡を中心として— 山田 祐子
九・一〇世紀における青森県周辺の地域性 宇部 則保
古代末期の北奥蝦夷社会 八木 光則
渤海から見た北東北のシャーマニズムと仏教 小嶋 芳孝

III 討論 ——南北の境界の比較
南北の境界領域の比較 —討論のまとめ—

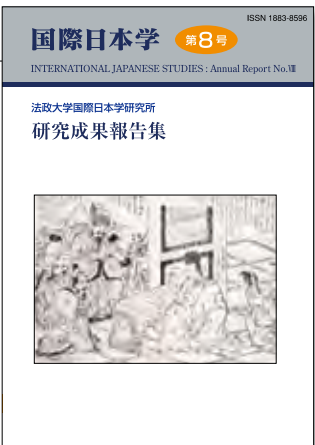


法政大学国際日本学研究所
研究成果報告集『国際日本学』第8号

研究成果報告
手塚治虫の映画作品とテレビ番組の相互作用 サミュエル・カクゾロフスキー
ベトナムにおける日本研究と研究者育成 ファン・ハイ・リン
大和言葉と日本人の情感表現に関する一考察 何 慈毅
世阿弥と李漁との演劇論における美意識の比較研究 —『風姿花伝』と『閑情偶寄』を中心に— 齊 明皓
国と人を同一視するべからず —日本学研究の人間的方向— 彭 鵬
中島敦の芸術至上主義 閻 瑜
石橋湛山の合理的思考と国益としての小日本主義 鈴村 裕輔

特集「ナショナリズムの表現」について
「日本」と「国益」—その複数の意味— 田中 優子
江戸時代の一般民衆の国家空間意識の形成における「旅」の役割 マルコ・ゴッタルド
近松の浄瑠璃にあらわれた日本優越意識 韓 京子
玉藻前説話にみられる自国意識と異国趣味 横山 泰子
江戸戯作の「ニッポン」自慢 小林ふみ子
曲亭馬琴の対外意識 —「水滸後伝批評平閑窓談」の評論を手がかりに— 黄 智暉
正成伝説の「桜井駅の訣別」について 李 忠浩
古活字版の淵源をめぐる諸問題 —所謂キリシタン版起源説を中心に— 小秋元 段
近世の外国語学習と自国語認識 —雨森芳洲を中心に— 奈良林 愛
私論小田野直武の思い —「唐美人図」における借用と創造— 彭 丹
秋田蘭画をめぐる、未着手の文化的背景 山本 文志
18世紀をとらえる観点 崔 官

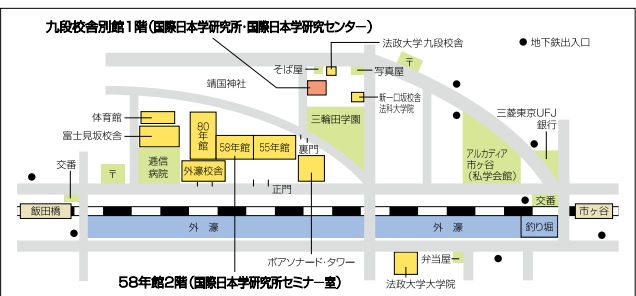
若手研究者論文
瀬尾光世の漫画映画における表現手法 吳 恵京
『おもろさうし』に見られる漢語について 阿部美菜子
江戸期における「権」の諸相 ～頼山陽の「権」論をめぐる～ 濱野靖一郎



彙報

法政大学国際日本学研究所
国際日本学研究所

〒102-0073
東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1 階
TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884
E-mail: nihon@hosei.ac.jp
URL: http://aterui.i.hosei.ac.jp



この冊子は再生紙を使用しています。